

子どもの民俗舞踊体験

—学校教育と地域社会の場を中心に—

弓削田 綾乃ⁱ

2011年に小学校の体育でダンスが必修化されたことを受けて、学校教育で民俗舞踊がどのように活用されてきたのかを検証した。文部科学省によれば、「各地域で親しまれている踊り」と「日本の代表的な民踊」の2種類があり、体育、総合的な学習の時間、運動会などで実施されてきた。前者は、教材としてアレンジされ、学校独自の文化として継承されているケースがあり、地域社会に受容されることで、子どもと地域社会との結びつきを深める場となっている。一方、後者は、身近な生活圏に民俗舞踊がない場合に実践されることが多く、代表的なものが盆踊りである。その場合、単なる体験で終わらず、子どもたちが関心をもって臨めるよう工夫することが肝要である。いずれも運動技能の習得だけでなく、社会的背景にも思いを巡らし、文化の基層を理解することが求められている。また、学校以外でも体験の機会を作ることが可能だ。その事例として、創造的身体表現活動について報告した。身体を介して民俗舞踊と出会い、自由な表現を生み出す。それは個々の地域文化との出会いであるとともに、地域社会の創造でもある。居住地域に民俗舞踊がない場合にも、より深い多様な体験ができるようなプログラムを提供することが、今後は必要だろう。

キーワード：子どもの民俗舞踊体験、学校教育、地域社会・文化、盆踊り、創造的身体表現

はじめに

2011年、小学校でダンスが必修化された。学習指導要領によると、低学年は「リズムあそび」、中学年は「リズムダンス」、高学年は「フォークダンス」が推奨されている。これらの中で民俗舞踊に該当するのが、高学年のフォークダンスの一部である。文部科学省の『小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック』によると、対象となるのは「伝承されてきた日本の地域の踊りや外国の踊り」であり、「みんなと一緒に踊るのが楽しい運動」として取り上げられている¹⁾。その目的としては、音楽に合わせて

多様なリズム、ステップで踊れるようになることだけでなく、踊りを通して日本や世界の文化に触れ、伝統的な文化を尊重する態度を育てることが掲げられている。その中で日本の民俗舞踊に注目すると、「各地域で親しまれている踊り」と「日本の代表的な民踊」の2種類が併記されており、後者の例として「ソーラン節」「阿波踊り」があげられている²⁾。これは、必ずしもすべての地域に学校教育で活用できる民俗舞踊が伝承されているわけではないことを示すもので、全国一律で同レベルの内容を実践できるとは限らない難しさを物語っている。それゆえ、「各地域で親しまれている踊り」と「日本の代表的な民謡」とでは、学びの目的や方法等に相違が生じると考えられる。本論では、それぞれの現状として、わが国で民俗舞踊が学校教育でどのように活用され

i 人間総合科学大学人間科学部講師

ているのか、すなわち体験の対象、ねらい、内容等について先行研究をもとに検証する。それから、民俗舞踊を用いて新たな身体表現活動を試みた事例を紹介し、民俗舞踊の可能性と課題について論じたい。

なお本論は、あくまでも誰でも出来る体験として民俗舞踊を実践する場合を対象とし、祭礼行事などの場で特定の子どもたちが伝承の主體的な担い手となるパターンは除いた。なぜならば、後者の多くの場合は、その祭礼行事の目的に合致した者のみが演じることが求められ、同じ地域社会に属する子どもたちの中でも経験できる者とできない者が生まれる。そこには、伝承にかかわるロジックがあり、教育とは分けて考えなければならないからである。

民俗舞踊の教育的効果としては、森下の次の論考を紹介したい³⁾。

民俗芸能は、地域社会の中で長らく培われてきた個々人の間のつながりや個々人の地域とのつながりを、一定の形で表現したものである。したがって、そうした芸能を演じることで、「地域社会という全体」を身体で感じることができる。この「地域社会」という視点を内在化することによって、子どもの頃から「節度」や集団生活の基本ルールを学ぶことができる。それとともに、自然環境を保全することは次の世代に対する現代人の責任といえる。自分たちが暮らしている環境への関心は、それに愛着をもつことから生まれ、「地域社会」を「郷土」と感じる程度に依存している。郷土芸能の実演は小さい子どもの頃から、環境への愛着心を養う。また、自然や風土の中で子どもたちの情緒が安定し、豊かになる。

多様な社会性や生きる力に結びつく方策として、民俗舞踊(芸能)を介して地域社会とのつながりを深めることを期待されていることがうかがえる。本論では、こうした点に着目し、具体的な内容をみていきたい。

なお、舞踊は中学校でも2012年から必修化しており、「フォークダンス」が行われている。さらに、就

学前の民俗舞踊体験については、例えば保育内容の「表現」領域での実践が報告されている。このように幼少期から義務教育に至る各現場で民俗舞踊が活用されていることも踏まえて、まず本論では小学校に焦点をあてて検討することにした。

1. 民俗舞踊と地域社会

(1) 民俗舞踊とは

ところで民俗舞踊とは何であろうか。それは、民俗芸能とは何かを知ることで理解できよう。民俗芸能について、『民俗探訪事典』では、「地域の住民によって行われる歌舞・音楽・演劇など」と定義されている⁴⁾。また西角井は、「日本という自然環境のもとに生きてきた日本人の信仰的な精神生活の、文化的な表出(心意伝承)として行われてきた芸能」とし、「生活の古典として善なるしきたり(周期伝承)であり、うけ継ぐべき生活経験(行動伝承)であるがゆえに、民俗として認識される芸能」と述べる⁵⁾。つまり、民俗芸能とは生活に密着したものであり、地域で暮らす人々に共有される精神的支柱を基盤としているということだろう。具体的には、本論で対象とする舞踊以外にも、音楽や演劇なども含まれる。そうした中で舞踊に関しては、西郷が、「民俗芸能における舞踊については「民族舞踊」「民俗舞踊」「民舞」などの用語があるが、それぞれの語は、この芸能(舞踊)をどう捉えるかという立場を示すもの」との見解を示した⁶⁾。

以上を踏まえて本稿は、地域で伝承されてきた舞踊、すなわち民俗芸能としての舞踊を対象とするため、「民俗舞踊」という語を用いたい。

(2) 地域社会の概念

次に、「地域社会」の概念を整理したい。1980年代の一般的な辞典では、「あまり広くない範囲の土地に住み、生活のうへの結びつきの強い社会」⁷⁾と説明されている。そして1990年代後半の社会学の辞典では、「一定の地域的な広がりとそのに居住する

人びとの帰属意識によって特徴づけられる社会。広がりとしては、近隣や町内などのコミュニティと呼ばれる小さなまとまりから、リージョンと呼ばれる一つの地方まで多様であり、地域社会としての特徴も一様ではない⁸⁾と説明される。これらをもみても、地域社会の定義は容易ではない。そうした中、子どもの視点から地域社会の課題を検証した住田は、「一定の地域的領域において営まれている、さまざまな人々の、持続的・直接的な、さまざまな相互作用が累積して形成された日常的な社会関係の集積体⁹⁾」とした。この説明からは、地域社会が必ずしも行政で分けられた区域ではないことがわかる。また住田は、地域社会の特徴として次の3つをあげている¹⁰⁾。一つ目は、多様な人々がいることである。性・年齢・個性・経歴・社会的地位・階層・価値観・規範・生活経験・生活様式等々、一人として同様の人間はいない。二つ目は、人間関係が自由であることである。三つ目は、地域の生活文化（地域文化）を共有することである。慣習・しきたり・風習・言語等の経験による類似的な生活感覚・行動様式・共感感情が存在する。

以上のことから、地域社会とは、多様な人々の自由な関係によって成り立ち、地理、生活、文化を共有するものであるととらえられよう。

2. 子どもを対象とした民俗舞踊体験の特性

(1) 伝承地域の学校教育における体験

これはすなわち、文部科学省が言うところの「各地域で親しまれている踊り」に該当する。総論として本田は、地域社会に育まれた伝統的な芸能について、それ自体が生涯学習の場であったと指摘する¹¹⁾。たとえば学校が伝承の一翼を担うことで、新しい伝承方法を模索するだけでなく、新たな交流の場の創造が成される可能性があるというのだ。このような見地から、学校教育における民俗芸能の教材化は、これまでも多くの試みがなされてきた¹²⁾。

日本の舞踊教育を築いた松本らの研究グループが、

1970年代に岡山県内での学校教育における民俗舞踊の実施状況を広く調査したものがある¹³⁾。その報告によれば、当時すでに約30%の小学校で過去5年以内に実施されていたことがわかる。また実施機会については、運動会が約60%と最多であり、体育（約20%）、学芸会あるいは音楽会（約9%）、クラブ活動と続く（約6%）。

このような教材化の一例として、森下は、静岡県浜松市のある小学校において、地域に伝承する盆行事の民俗芸能「滝沢の放歌踊り」が行われている事例を報告した¹⁴⁾。報告によるとこの小学校では、昭和48年から取り組んでいる活動ということだ。ここでは、小学校低学年でも取り組むことができるようにアレンジして「子ども放歌踊り」をつくり、保存会の協力を得て、毎週1回以上の頻度で全学年で取り組んでいた。平成18年に近隣の小学校と統合してからは、アレンジ前の「滝沢の放歌踊り」をクラブ活動で引き続きおこなっているという。この踊りは、人や作物に害を与える悪魔を追い払い、幸せを呼び込むという行事がもとになっており、大きな団扇を持って激しく動くのが特徴の一つである。また、統合後のクラブ活動での取り組みは、それぞれの担当の楽器や道具を持ちながら踊るため、巧みな体づかいが必要であり、子どもにとっては複雑で難しい芸能だと森下は指摘する。こうした活動が、子どもたちに何をもたらすのだろうか。森下の論をまとめると、踊りに必要な諸技術、多様な動き方やリズム感等の運動技能、外部者（主に保存会）との交流、学年を超えた連帯感であり、それらに加えて本来の民俗舞踊の後継者育成の可能性をも指摘されている。このように幼少期における身体の巧みな総合運動能力を高める効果だけでなく、心の問題も含めて子どもを好ましい方向に導くことが、民俗舞踊の教育的価値として示唆された¹⁵⁾。

また、忘れてはならないのが、小学校における「総合的な学習の時間」での民俗舞踊の学修であろう。文部科学省の学習指導要領の解説には、多様な学習方法の例として、地域の文化財や伝統行事等が

あげられている。これらを題材とした探求が、思考力や社会性などの育成につながる事が明記されているのだ。具体的には、「地域の人々と親密になる」「地域の自然や文化財等に関心をもつ」「地域の伝統行事等に参加したりするようになる」ことがあげられ、こうしたことが「地域への愛着を高め、豊かな生活を送ること」や「郷土を創る次世代の人材育成や持続可能な地域社会の形成」などにつながると記されている¹⁶⁾。これに関連して、卯田は、学校教育への民俗芸能の導入が始まった時期を1970年代頃とし、1998年の学習指導要領改訂および「総合的な学習の時間」の創設によって各地で体験型として採用されるようになったと指摘する¹⁷⁾。卯田の調査によれば、東北地方のある県では、小中学校の約半数で民俗芸能を活用しているという。また、そのことが、学校自体の伝統文化となりつつある現象が起きていることも示唆した。

さらに民俗舞踊の体験として多いのは、運動会の表現種目としておこなう場合ではないだろうか。学習指導要領での運動会は「体育的行事」に位置づけられる。そして、「心身の健全な発達や健康の保持増進などについての関心を高め、安全な行動や規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資するような活動を行うこと」を目標として進められる類のものである¹⁸⁾。

これに関しては、小西が小笠原地方の小中高合同の運動会において、表現種目の「子ども南洋踊り」の実践について報告したものが¹⁹⁾ある。移住者が少なくないこの地域で、1991年頃から地域伝承の「南洋踊り」をベースにした舞踊を実践するようになったという。その教授法は、伝承者を招聘した伝統的稽古法からスタートしたとされ、まずは民謡をマスターしてから、模範演技をみながら全体学習するという流れだった。運動会での披露は、地域住民に好評であり、そうした反応が子どもたちの学習意欲にもつながってきたという。そしてこの活動が古来の「南洋踊り」自体を発展させるとともに、“小笠

原島民”というアイデンティティの創出にも貢献していることを指摘した。興味深いのは、そうしたアイデンティティの創出が、とりわけ移住者たちを中心になされていることだ。流動的な地域社会と、そこで生活する子どもたちを含めた人々をつなぐ役割を、学校教育での民俗舞踊体験が担ってきた事例といえるだろう。

以上のように、学校教育においては、体育科目ならびに総合的な学習の時間、運動会を始めとした学校行事等で民俗舞踊が活用されてきたことがわかる。その目的においては、身体活動を通じた総合的教育力を期待する傾向がある。そこでは、本田が留意点としてあげる「芸能の本質やすぐれた伝統の知恵をみきわめ尊重し活かすこと」「地域の人々との交流を大切にすること」²⁰⁾などに配慮しつつ、学校独自の舞踊文化に変換して実践している様子が見てとれる。そしてそうした活動が一過的でなく継続される場合が多い状況からは、現場で民俗舞踊の教育的効果が認められていると同時に、地域社会に受け入れられ、地域社会の存続にも一役買っていることがうかがい知れる。

(2) 非伝承地域での民俗舞踊の体験

では、民俗舞踊が伝承されていない地域では、どのような様相を呈しているのだろうか。前項でとりあげた松本らによる1970年代の岡山県内の学校での民俗舞踊の実施状況調査によると、地域にゆかりのある民俗舞踊以外に、「花笠踊り」「佐渡おけさ」「ソーラン節」「木曾節」「炭坑節」「安来節」等の県外の舞踊も実践されていたことが判明している²¹⁾。これらが該当するのが、文部科学省が言う「日本の代表的な民踊」であろう。これによって、いわゆる「盆踊り」の適性の高さと、機会として運動会で行われる傾向が高かったことが示唆された。

盆踊りの教材化に関して論じた本田は、盆踊りの本質を「自由で創造性に富み、個性ゆたかでノリのよい」ことであると述べた²²⁾。さらに本田は、教材化に適しているものとして「郡上踊り」「阿波踊

り」「八木節」「佐渡おけさ」「姫島の盆踊り」などをあげている。いずれも伝承地の名称が冠された“ご当地もの”の民俗舞踊であるにも関わらず、全国的に踊られる傾向があるものだ。では、こうした盆踊りの教材としての特性は何なのだろうか。本田の検証によると、①高度な技術を必要としない運動、②表現・運動形態の豊富さ、③運動形態の柔軟性（アレンジ）、④踊り手相互の強力なコミュニケーションの4点があげられている²³⁾。

これらのうち、盆踊りの運動特性に着目した研究として、山田が124種の曲目を対象に上半身の動きを分析したものがある²⁴⁾。1曲ごとの反復の所作の手数を抽出すると、もっとも多くを占めるのが6手、次が12手であった。また、全体の34.7%にあたる43演目が、2～6手であった。手数が少ないということは、同じフレーズの所作を繰り返しているということになる。山田は、こうした単純な動きの繰り返しのことによって、共に唄い、踊る人々の共感・共振を高める精神的効果があると指摘している。

以上のことを鑑みると、盆踊りはリズムカルでありつつも少ない数の所作を繰り返す舞踊であることが大きな特徴であり、曲の種類も豊富であることから、教材として取捨選択がしやすいのではないかと思われる。また、「日本の代表的な民謡」の多くは、関連する書籍や映像資料なども豊富で、音源も安価に手に入れやすい。この点も、教材として扱いやすい理由なのではないだろうか。

なお、舞踊の必修化を受けて、現場で参考にできる指導法の文献が2011年以降に数多く出版された。その一つである全国ダンス・表現運動授業研究会による指導書には、子どもたちの運動欲求を満たすような律動的で運動量の多い踊りとして、「郡上踊り」「ソーラン節」「エイサー」が紹介されている²⁵⁾。また、運動会の作品として展開させるのに適した事例としては、「阿波踊り」が紹介されている。いずれも“導入～展開～まとめ”の順に詳しい指導法が記されており、各舞踊の起源や所作の意味などといった背景の理解を促しながら主体的な学習につなげ

ていくことが求められている。

また舞踊学を概説した『舞踊学講義』では、学校教育での民俗舞踊の指導について、身近な生活圏に適切な舞踊がない場合は、地域の範囲を広げることが提案されている²⁶⁾。そして全国的に有名な民謡の踊りや盆踊りをとり上げるのもよいが、その場合も“本籍地”での踊りの実態を可能な限り調べることが望ましいとしている。これらのことから、選定基準として踊りの楽しさだけでなく、子どもたちがより身近に感じられるような内容を吟味することや、他教科との連携を持たせるなどの工夫が必要だと理解できよう。

ところで、大阪府の都市部の小学校での運動会での表現演舞に関する2002年の小西の報告によると、日本民謡を含むフォークダンスが、リズムダンスや徒手的表現運動などとともにおこなわれていたという²⁷⁾。使われていた音楽は「長年日本で親しまれてきた民俗音楽」²⁸⁾であり、地域独自の民俗舞踊がないゆえに「学校文化としての新しい民俗芸能的なもの、たとえば長年にわたって学校内で継承可能なパフォーマンス」が創出されていると指摘した。こうした学校独自の舞踊文化への転換という現象は、民俗舞踊が伝承されている地域でも起きており、興味深い。

3. 民俗舞踊から創造的身体表現へ——三匹獅子舞をテーマとした表現あそびの事例

(1) 地域社会と創造的身体表現

本論では、主に小学校における民俗舞踊体験について考えてきた。民俗舞踊が地域社会の中で生まれ、伝承されてきたものであることから、その活用には、大なり小なり地域社会とのつながりが欠かせないことはこれまで述べた通りである。これを受けて本項では、民俗舞踊の新たな体験として、地域社会で生きる子どもと民俗舞踊との出会いを創造的身体表現という手法で試みた事例を検討してみたい。

深作は、地域社会そのものには教育力があるとし

て、その要は体験と人とのつながりであると論じた²⁹⁾。そのために必要なこととして、金子は、次の3つを提唱する。①つなぐための素材を見つけること、②誰と、何をつなげるかの方法を探ること、③場の設定とプログラムを吟味することである³⁰⁾。本論で「つなぐための素材」として着目するのが、身体表現としての民俗舞踊である。身体表現については、美二がダンスセラピーの領域において「言葉を交わすより大きく、深く対話することができ、心と心が結ばれる」ということを、実践者の体験・感覚を追うことで検証した³¹⁾。また仲間とともに舞踊をすることで、人と人、あるいは人と学校とがつながり、学校というコミュニティの活性化が図られることも指摘されている³²⁾。

では、地域社会と身体表現とが相互に関わり合いながら、豊かな人間、豊かな社会を支え育んでいくことは可能なのだろうか。この可能性を探るため、本項では、多様な人々による創造的身体表現における民俗舞踊の活用に焦点をあて、その可能性を検討する。

(2) 表現あそび

2017年の春、千葉県内のある地域のフリースペースで、周辺地域に居住する親子を対象とした身体表現ワークショップが実施された。このワークショップは、「表現あそび」として、2013年から年に8回前後の頻度で筆者が実施している活動の一環である。「地域の人の手で地域の表現をすること」を模索するこの活動で、「民俗舞踊」をテーマに表現あそびを試みたのである³³⁾。

当該地域では、毎年、神社の秋祭りで「三匹獅子舞」が奉納される(写真1)。三匹の獅子に扮した10代の若者たちが、腹にくくりつけた太鼓を打ち鳴らし、笛の音にあわせて勇壮な舞いを披露するものだ。近年は、近くの小学校・幼稚園・保育園などでも「三匹獅子舞」の話題が出されており、絵画の題材や地域文化の学習などに活用されている。こうした「三匹獅子舞」を身体表現のテーマとしたのであ

る。当日は、2歳から小学4年生までの子どもとその保護者、計4家族が参加した。全体の流れは、次の通りである。

- ①からだほぐし
- ②“三匹獅子舞”になろう：篠笛と太鼓(床置き)にあわせて自由に表現
- ③“三匹獅子舞”って?：知っていることや想像したことなどを言葉で伝え合う・写真を見ながら語り合う
- ④身体表現を創ろう：3～4人のグループで自由に創作、発表と鑑賞

②では、フロア全体を使って、自由に動くよう声をかけたところ、両手を後ろに伸ばして腰を落とし、上半身をゆらゆらと揺らす、大きな足音を立てて跳びあがる、からだを伸び縮みさせながら走る、数人で会話をするように頭を突き合わせて小刻みに震わせるなど、思い思いの表現が出てきた(写真2)。ここでは前もって「三匹獅子舞」についての説明をしていないのに、いずれも「獅子舞っぽい」動きをしており、それぞれが何かしらのイメージをすでに持っていたことがわかる。そうしたイメージを、③では言葉で伝え合う作業をした。これによって、イメージの多様性に気づくとともに、「三匹獅子舞」がもつ物語性(由来譚、伝承制度)などにも触れることができた。

④では、ここまでの体験を経て湧きあがった思いを身体で表現した。その際のテーマは自由であり、必ずしも「三匹獅子舞」にこだわる必要はないことを告げていた。以下に、作品の一つを紹介したい。

タイトルは「蛇を食べる」というものだ。最初は4人でつながり、大蛇となった。ひとしきり暴れると、1人だけ横たわった。それを残る3人が食べ始める。大蛇は触れられると、のけぞったり足をあげたりする。大蛇が「骨」になって去るまで、食べる側と食べられる側の攻防が続くというものだった。この表現は、「三匹獅子舞」の中で、地域に害をなす

蛇を倒す場面があることからイメージをしたのだろうと思われた。この場面は、祭礼では演者たちが刀で竹（＝蛇）を叩き切る動きによって表され、地域社会の1年間の平安を祈る思いが込められている。しかし「三匹獅子舞」と身体を介して出会い、自由なイメージを認め合うという体験を経た子どもたちが表現していたのは、“祈り”だけではなかった。倒される蛇自身の“痛み”をも表現していたのである。最後に骨だけになった蛇は、天に昇り神になった。新たな物語が創られたのだ。それは必ずしも“三匹獅子舞”の本来の意味内容と一致しないかもしれない。しかし地域社会に伝わる舞踊として「三匹獅子舞」に触れてきた経験と、表現あそびの前半に獅子のイメージを自由に表現し、他者と共有した体験とが溶け合い、このような物語を生み出したのではないかと考える。

以上の試みは、対象とする民俗舞踊を忠実に習い覚えるという類のものではなく、身体表現創出のための素材として民俗舞踊を活用したものである。言い換えれば、民俗舞踊が元来もっている豊かな表現性への共感を促す体験ととらえられる。人は、ひとりひとりが異なる感受性を備えている。それゆえ、出会った対象への気づきと、それによって喚起されるイメージや表現方法も異なるのが自然だろう。民俗舞踊との出会いも同様であり、それまでの接し方や関心の度合いだけでなく、生来のあらゆる経験が統合されて、その人なりの表現が生まれてくるものだ。そうした出会いと共感、表現の共有を通して、民俗舞踊——地域文化との関係を深めていくことも可能なのではないだろうか。

今回の事例は、当該地域で親しまれてきた民俗舞踊を扱ったが、他地域の民俗舞踊いわゆる「日本の代表的な民謡」でも、同じような現象が起こるのだろうか。それについては、今後実践を含めて検討していきたい。なお、小学生に「日本の代表的民謡」として「花笠音頭」を学習させた後に、創造的な即興表現をさせて、どのような影響が出たのかを検証した研究がある³⁴⁾。それによれば、「花笠音頭」体



写真1 三匹獅子舞



写真2 獅子舞になって自由に表現

験後の方が、空間・時間・力性において動作表現に拡がりが見られたという。この研究は、即興表現に「花笠音頭」の要素をあえて入れずに、動き方の変容をみている。このように、民俗舞踊と創造的身体表現とを関連づける観点と方法は複数あると言えるだろう。

おわりに

本論は、2011年に小学校でダンスが必修化されたことを受けて、民俗舞踊が学校教育でどのように活用されてきたのかを先行研究をもとに検証してきた。学校教育においては、体育科目ならびに総合的な学習の時間、運動会等で民俗舞踊が活用されている。そこで取り扱う民俗舞踊には、文部科学省の指針に

よれば「各地域で親しまれている踊り」と「日本の代表的な民踊」の2種類がある。いずれも民俗舞踊ならではのリズムカルな動作を実践することにより、運動技能を習得したり仲間とのコミュニケーションをはかったりすることを大きな目的としている。そしてまた、民俗舞踊の社会的背景にも思いを巡らし、文化の基層を理解することも求められている。

身近に民俗舞踊がある場合は、「各地域で親しまれている踊り」として教材化され、独自の学校文化として継承されているケースもあった。そうした活動は、子どもにとって学校コミュニティや地域社会との結びつきを深めるものであると同時に、地域の人々にとっても、アイデンティティ創出に貢献しうるものであることが示唆された。また、学校での体験が民俗舞踊の後継者育成に寄与する一面があることも指摘した。いずれにしても、学校運営の一環として地域社会を巻き込み、子どもたちが主体的に学んでいくための民俗舞踊教材の確立が問われているだろう。

一方、生活圏に民俗舞踊が伝承されていない場合は、「日本の代表的な民踊」が実践されてきた。その中で代表的なのが盆踊りの曲目であり、所作の手数が少ないにも関わらず、運動性と表現性に優れており、踊りやすくアレンジもしやすい点が選択理由として考えられた。留意しなければならないのが、単なる体験のみで終わらせるのではなく、起源や社会背景などを調べ、子どもたちが関心をもって臨めるよう工夫することであろう。

また本論では、民俗舞踊の活用の一事例として、三匹獅子舞をテーマにした創造的身体表現の活動について報告した。身近な存在として折に触れ接してきた民俗舞踊をもとに、自由にイメージをふくらませ、他者と共有し、認め合い、新たな物語を表出するという一連の展開がみられた。このような展開は、創造的身体表現においては典型的にみられる形である。そうした中でこの事例の独自性は、身体を通じた地域文化との共創ということにあるのではないだろうか。それは、個々の子どもにとっての地域との

関係構築であるとともに、地域社会自体を創造しようとする行為でもあると考える。

以上のように、子どもが民俗舞踊を体験する場合は学校教育が主流であり、ねらいも明確であるものの、身近に民俗舞踊がある場合と無い場合とでは、体験の内容に差が出てくるのは否めない。しかしどのような場合も、運動としての楽しさだけでなく、文化体験として学びを深めることが求められており、そこから新たな地域文化創造の機会を育むことも可能である。そうした意味では、学校以外でも体験の機会を作ることは可能だと考える。たとえば本論で報告した身体表現活動のほかにも、自治体やNPO団体などが主催する文化体験事業もある。これらの活動も含めて、住んでいる地域に“たまたま”民俗舞踊がない場合にも、より深い多様な体験ができるようなプログラムを考え、提供していくことが今後は必要だろう。

本研究の一部はJSPS 科研費 JP15K01535の助成を受けたものです。

引用文献

- 1) 文部科学省『小学校体育(運動領域)まるわかりハンドブック 高学年(第5学年及び第6学年)』(2011年)52頁
- 2) 同53頁
- 3) 森下春枝「幼少期における民俗芸能の活用—子どもの心と身体を育てるアプローチとして—」(『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第19号, 2011年)21-32頁
- 4) 大島暁雄・佐藤良博・松崎憲三・宮内正勝・宮田登『民俗探訪事典』(山川出版, 1983年)351頁
- 5) 西角井正大『民俗芸能入門』(文研出版, 1979年)62頁
- 6) 西郷由布子「学校で教える民俗芸能」(『演劇学論集 日本演劇学会紀要』44巻, 2006年)87-107頁
- 7) 見坊豪紀・金田一京助・金田一春彦・柴田武編著『三省堂国語辞典』(第三版)(三省堂, 1983年)672頁
- 8) 濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘編『社会学小辞

- 典 新版』（有斐閣，1997年）424頁
- 9) 住田正樹『子どもと地域社会』（学文社，2010年）6頁
 - 10) 同6頁
 - 11) 本田郁子「地域に根ざしたダンス教育をめざして」（『ダンスの教育学』第6巻，徳間書店）208-209頁
 - 12) 中森孜郎『日本の子どもに日本の踊りを』（大修館書店，1990）
 - 13) 松本千代栄・興水はる海・石黒節子・外山友子・池田裕恵・池田雅子・川口千代「運動表現の民族的特性に関する研究—第一報—」（『松本千代栄撰集 第2期—研究編3 舞踊教育史・比較舞踊学領域』明治図書，2010年：初出『日本女子体育連盟紀要'71』22-82頁）140-193頁
 - 14) 森下25-28頁
 - 15) 同28頁
 - 16) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』（文部科学省，2017年）57頁
 - 17) 卯田卓矢「小学校における民俗芸能の継承活動と統廃合—岩手県一関市を事例として」（『2016年度日本地理学会秋季学術大会抄録』2016年）
 - 18) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別活動編』（文部科学省，2008年）92-92頁
 - 19) 小西潤子「学校文化と地域社会を接合する民俗芸能—小笠原諸島における南洋踊りの伝承とその児童による連合運動会でのパフォーマンスを中心に—」（『静岡大学教育学部研究報告』第33号，2002年）99-115頁
 - 20) 本田郁子「地域に根ざしたダンス教育をめざして」（『ダンスの教育学』第6巻，徳間書店）144頁
 - 21) 松本140-193頁
 - 22) 本田郁子「盆踊り再発見—個性・創造・生涯体育は伝統にあり—」（社団法人日本女子体育連盟『女子体育』第34巻第7号，1992年）51頁
 - 23) 本田郁子「舞踊教育における地域伝統芸能教材化のためのフィールドワークの視点」（『平成5年度文部省特定研究報告書「異文化教育の研究のための情報システムの構築」』お茶の水女子大学，1994年）147-154頁
 - 24) 山田敦子「盆踊りの所作」（『高知大学教育学部研究報告』第69号，2009年）203-218頁
 - 25) 全国ダンス・表現運動授業研究会編『明日からトライ！ダンスの授業』（大修館書店，2011年）75-81頁，124-125頁
 - 26) 池田雅子「民俗舞踊の指導」（『舞踊学講義』1991年）210-213頁
 - 27) 小西99-115頁
 - 28) 同108頁
 - 29) 深作拓郎『地域で遊ぶ，地域で育つ子どもたち』（学文社，2012年）19頁
 - 30) 金子さん「地域のなかで生きる演劇活動」（『子どもの豊かな育ちと地域支援』学文社，2002年）312-322頁
 - 31) 美二三枝子「ダンスのもつ力と可能性を考える」（『体育科教育』3月号，2008年）10-13頁
 - 32) 全国ダンス・表現運動授業研究会133-155頁
 - 33) 弓削田綾乃「地域の子どもの地域での表現」（『からだからはじまる保育のアート—創造と表現がつながってあふれる』市村出版，2018年）130-132頁
 - 34) 高橋芳子・大貫義人「花笠音頭踊りの学習が即興表現に及ぼす影響」（『日本体育学会第38回大会抄録集』1987年）400頁

Children's Folk Dance Experience : Focusing on School Education and Local Community

YUGETA Ayano ⁱ

Abstract : We examined how folk dance was used in school education after the necessity of dance in elementary school education was accepted in 2011. According to the MEXT, two types of dance, “local dance popular in respective regions” and “Japanese national dance,” have been implemented in physical education, comprehensive learning time and athletic meets. In some cases the former is employed as teaching material and passed down as an original culture of the school. It has become a place to strengthen the connection between children and the community since it is well received by local communities. On the other hand, the latter is often practised when there is no folk dance in the local region, and the representative form of dance is Bon Odori. In that case, it is vital that we cannot finish by a mere experience, so that children can focus on their interests. In that case, it is essential to devise measures to ensure that children are interested, not just as an experience. Also, it is possible to create opportunities for experiences outside the school. As an example of this, I reported on creative physical expression activity, in which folk dances are approached through the body to create free expression. Along with encountering individual regional culture, it is also a way of creating the local community. It will be necessary in the future to provide a program that enables deeper and more diverse experiences even in the absence of folk dance in the local area.

Keywords : children's folk dance experience, school education, local community/culture, Bon Odori, creative physical expression

ⁱ Assistant Professor, Department of Health Sciences of Mind and Body, University of Human Arts and Sciences